

# 第一章 神々の原風景——ヴェーダ

神々の原風景とは、神々の生誕の地、神々の活動の場、神々の生活の場を指す。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。

神々の原風景とは、神々の生誕の地、神々の活動の場、神々の生活の場を指す。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。神々の原風景は、神々の生活の場であり、神々の活動の場であり、神々の生誕の地である。

アーリヤ人の言語（インド・アーリヤ語）はインド・イラン語派（またはアーリヤ語派）に属し、ヨーロッパ諸語や死語となったヒッタイト語やトカラ語などとともに、インド・ヨーロッパ祖語に遡る。インドの「アーリヤ」人は、分かれてイランに入った「アリア」人（語頭のAが短い。「イーラーン」という語はこれに遡る）との共通時代（インド・イラン祖語またはアーリヤ祖語時代）を経た後、紀元前二〇〇〇年の中頃には、今日のアフガニスタンの山岳地帯からインダス河上流地域に入って来た。そこで、移住性（遊牧・掠奪を中心とし、季節的に農耕を行なう生活形態）を弱め、定住化を強めてゆく中で、最初に編集された文献が讃歌集『リグヴェーダ』（リグヴェーダ・サンヒター、リグヴェーダ本集）である。編集年代を示す直接の指標はないが、相対的時代配分からは、紀元前一二〇〇年頃が目安になろう。

ホートリという祭官職の家系に伝わった千篇あまり、一万以上の詩の中核となるのは、詩人が観得した、真理・宇宙秩序（リタ）の認識に基づき、真実・事実（サテヤ）にかなった、正しいことば（の形）が持つ実現力（ブラフマン）の籠もった詩句である。多用される語りのモードにインジャンクティブという、過去・現在といった「時」の表示機能をもたない動詞形があるが、誇張して言えば、ホメーロスの叙事詩のような出来事を人に「報告」する「物語」ではなく、既に知っているはずのこと、真理や共通体験に「言及」する、歴史を越えた文学という性格をもつ。この『リグヴェーダ』の「原型」が生じたのは彼らがインドへ入る以前のこと、原材料のかなりの部分はインド・イラン共通時代に遡

る。現存するテキストに山岳地帯（場合によってはステップ地帯）での掠奪・遊牧を中心とした生活を反映する詩節、詩句、単語が多く混在するのはこのためである。編集されて現存するのは、インダス河上流域で最終的な形を得た、つまりその家系に属する後代の職業祭官たる詩人が本来の詩に擬して作った、神々への讃歌の姿といえる。それらを取り囲んで、彼らが独自に作った讃歌や詩節も存在する。

「ホートリ」はイランのザオタル（祭官・司祭）と同じ語で、もともと「祭火の中に供物、殊にバターなど燃え上がるものを）注ぎ込み、献ずる人」を意味する。しかし、古典的祭式組織の中では、供物を受けるべき神を祭場に招き迎えるための讃歌を唱え、そして（アドヴァリユという別の祭官職が）供物を火中に献じるのに合わせて、その神を讃える詩句を唱えることを努めとしていた。祭式には、大別して、穀物や犠牲獣を供物とするグループと、ソーマという植物の茎の搾り液を用いる儀礼を中心に構成されたグループとがあり、大きな祭式は更にこれらを構成要素として組み立てられる。「リグヴェーダ」から推定される古い姿ではソーマ祭の占める比重が大きい。ソーマ祭の場合には讃歌に節をつけて歌うサーマン（歌詠）が行なわれ、ゾドガートリ（歌い上げる者）祭官を中心とするチャンネル（旋律歌い）祭官たちが担当する。彼らには「サーマヴェーダ・サンヒター」という節と歌詞の集成が属しているが、歌詞はほとんど編集された「リグヴェーダ」からの借用であり、このことも「リグヴェーダ」の背後にあった祭式の姿を推測する際の手懸かりとなる。

ソーマは「搾り出す」を意味する語根からの派生名詞で、精神活動を昂揚させる働きのある植物エキス、および植物そのものの名であり、イランのゾロアスター（マズダヤスナ）教徒のハオマに対応する。したがってその使用はインド・イラン共通時代の文化に遡る。エフエドリンを含むエフエドラ（麻黄）の一種に同定する説が（少なくともヴェーダ・アウエスタの研究者の間では）有力である。イランの山岳部では今日でもこの植物がハオマとして用いられると報告されているが、インドの平原に入ったアーリヤ人には入手不可能であったらしく、代用品が使われる。このこともソーマ祭の比重の減退とアドヴァリユ祭司の擡頭とに関係しているかもしれない。「リグヴェーダ」の詩人はカヴィ「見者」と呼ばれるが、別にリシ、ヴィブ、ヴィプラ等の呼称がある。「興奮に荒ぶれる」ないし「興奮にうち震える」が原義に推定され、『リグヴェーダ』の詩句は、精神昂揚した詩人（祭司）が「見た」（本書第二章？参照）、実現力（ブラフマン）の籠もった詩句に基づくが、そのためにはソーマが大きな役割を果たしたであろう。ソーマが戦闘や掠奪行為に携わる場合にも人を奮い立たせたことはインドラ讃歌などに見るとおりである。

神々の背景には大別して二つのグループが想定される。第一のグループは「デーヴァ」である。この語は天（昼間見える輝く天空の覆い）を意味するデイヤウ（ギリシア語のデウス、ゼウス、ラテン語のデイウス）から作られた形容詞「天に属する」から来ており、ラテン語のデウスに等しい。昔からの「神々」であり、自然界の諸現象（太陽の諸相、暴風、雨、大地など）や英雄神を包摂する。火（アグニ）やソーマもこれに属する。第二の

の比喩的意味  
 定住生活(の)側面  
 dakka → 職制の能力  
 meishu  
 職制の理

社会制度と管理は  
 いのちが祭壇(言語と司)面  
 「神」というチャンセルを経る。

グループはアスラたちと呼ばれ、アーディティヤ神群(アディティ「無拘束、自由」に属するの意)と総称される。こちらはインド・イラン段階で、社会制度の発展に伴って生じた新しい神々であり、諸々の社会制度の神格化である。王権の神格化たるヴァルウナ、契約の神格化であるミトラ(普通名詞で「契約」、後に「契約関係にある者、友」、部族の慣習の神格化で、ことに契約(同盟)関係にある他部族の構成員や客分の待遇を保証する神アリヤマン、家族間の財産・獲得物の配分決定を神格化したバガ(配分、幸運、家族内の各個人への配分を神格化したアンシャ(部分、分与)などが属する。インドの人々は太古からのデーヴァたちに親近感を持ち、新しい制度神を畏れた。アスラの語は散文文献の時代になると全く「悪い神」、ほとんど「悪魔、魔神」の意味になっており、仏教文献の阿修羅へと連なる。イラン側では逆にデーヴァが恐れられ、ゾロアスター教典の対応形ダエーワはほぼ「悪魔」を意味する。一方、アスラに対するイランの対応形アフラはゾロアスター(ザラスシュトラ)の宗教改革によって、アフラ・マズダー「知恵なる主(または、知恵ある主)」として、唯一神の座に据えられた。(おそらくアスラIIアフラ「主、首長」はもともと  
 はヴァルウナのエピテートであつたろう。)

ここでは、デーヴァを代表するインドラ神への讃歌から、その最大の功業、ヴリトラ殺しを具体的に描写するもの(1)と独自な色彩の強いもの(2)と各一篇、アスラたるヴァルウナへの讃歌から同様に、伝統的性格の強いもの(3)と個人的体験に基づくと思われるもの(4)と各一篇を訳出し、さらに、最新層を含む第一〇巻から二篇を選んだ。

7 第1章 神々の原風景

cf. now  
 INSILER JAOS 113(1993) 596<sup>c</sup>  
 GOTŌ → JIBS 39-2 (1994) 978 n.2

底本は以下のものを用いた。

Theodor Aufrecht ed., *Die Hymnen des Rigveda*. 2 Bde. 2. Auflage. Bonn, 1877. Reprint.  
Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1968.

Vytra 殺し

・117キ17:

・E.1101 purvāt nṣānāś śāradhāca  
IV 19, 8

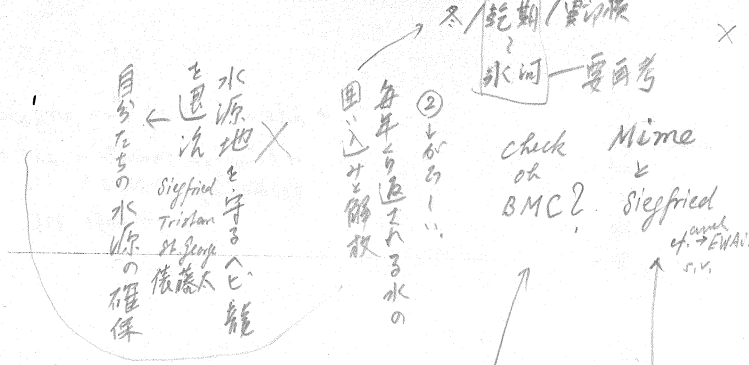
水源地の確保

\* āsman- IV 22, 1<sup>a</sup> - vṛśandhī-  
d.h. vṛśa-sandhī- 'mit starker  
Verbindung' IV 22, 2<sup>a</sup>  
→ KH Aufz. 395

### 蛇を殺す神

インドラに固有の武器はヴァジュラと呼ばれる棍棒（金剛杵）である。ヴァジュラには各種あった。（木の又にも）石を縛り付けたもの（アドリヴァント）、金属製で多くの刃（アシユリ、アヴェスタではダーラー）の付いたもの、多くの突起（プリシユテイ、スタナ「乳首」、アヴェスタではフシユターナ）の付いたもの、瘤（パルヴァン「節」）を持つものなどである。インドラはこれを腕で支えて持つらしいことから（第一五節参照）、相当に重い武器が主体であったことが知られる。「飛び道具」と呼ばれることもあるが（第三節）、敵に投げつける使用法をいったものであるか。インドラが雷霆神と解釈され、ヴァジュラが電撃と結び付けられ得る箇所は例外的にしかなく、極めて特殊な、二次的な事柄と判断される。インドラの代表的功績は「ヴリトラ退治」と呼ばれるものである。ヴリトラは本来「障碍」を意味する中性名詞であったが、この意味は複数形だけに保たれた。インドラはインド・イラン共通時代すでに、アーリヤ人たちのために「障碍を打ち砕く」英雄神であった。これとは別に、古代社会に普遍的な、水源や井戸を囲んで蟠踞する魔物としての蛇（他の神話世界では「竜」というような特別な語で呼ばれることがあるが、インドでは普通に蛇を意味する「アヒ」と呼ばれた）を退治する神話があったらしい。この、障碍を打破する者（ヴリトラハン）としてのインドラの神話と、蛇退治の英雄（アヒハン）としての神話とが融合して、ヴリトラすなわち蛇（アヒ）と考えられた。その結果、ヴリトラは山を巻き囲んで水（河川）を閉じ込めている、蛇の姿をした魔物とされ、男性名詞となっていた。河川の解放が具体的に何を意味するかをめぐっては諸解釈がある。

<三層構造>



最近の... トエ注(2)

インドラの諸々の武勇を私は今(ここに)明言する、  
 ヴァジュラ(棍棒)をもつ彼が最初のこととして成しとげたところの。  
 蛇(ヴリトラ)を彼は打ち殺した。穿つて水を導きだしたのだ。  
 山の懐を彼は切り開いた。(一・三三・一)  
 山に身を寄せていた蛇を彼は打ち殺した。  
 トヴァシュトリが彼のために音をたてるヴァジュラを工作したのだ。  
 鳴き声を上げる乳牛たちのように、流れながら  
 水たちはまっすぐに海へ下ったのだ。(二)  
 奮い立つて彼はソーマを選びとった。  
 トウリカドウルカ(三つのソーマ桶をもつものたち?)の間で、搾られた(ソーマ)を飲んだ。  
 有能なる者(インドラ)は飛び道具を執った、ヴァジュラを。  
 この蛇たちの間で最初に生まれた者を彼は打ち殺した。(三)  
 おまえが、インドラよ、蛇たちの間で最初に生まれた者を打ち殺し、  
 それから、幻力使いたちの幻力(マヤー)をも挫いた時、  
 それから、太陽を、天を、曙を生み出しつつ、  
 それ以来、敵をおまえは全く見出さなかつたのだ。(四)  
 他に勝る障碍(ヴリトラ)である、肩を広げたヴリトラを打ち殺した、  
 インドラは大きな武器、ヴァジュラで。



ちぎられた  
(毎年の手入? team)

——『斧によって伐り刻まれた枝張りのように(切り刻まれて)、

蛇は大地を(血で)受胎させつつ横たわるがよい』——(と思ひながら)。(五)

(ヴリトラは)戦さを知らぬ者のように、驕り昂ぶって、招き寄せたのだ。強力に押し除け、まっすぐに突進する偉大な勇者を。

(ヴリトラは)彼の武器の衝撃を持ちこたえられないのだった。

インドラを敵とした彼はもがれて鼻を失い、打ち砕かれたのだ。(六)足の無い、手の無い彼はインドラに戦いを挑んだ。

ヴァジュラを(インドラは)彼の背の上に打ち下ろしたのだ。

去勢された身で種牛に匹敵するものになろうとし、

ヴリトラは多くの場所に飛び散って横たわっていた。(七)

切られた葦のように、無惨に横たわっている彼(の上)に

水は乗り、のり越えてマヌ(人類)のものとして進む。

ヴリトラが(彼自身の)大きさを取り囲んでいた、

その同じ(水)の足元に横たわる者と蛇(≡ヴリトラ)はなつたのだ。(八)

ヴリトラを子にもつ者(ヴリトラの母)は活力が下向した。

インドラは彼女に向かって凶器を振り下ろしたのだ。

産みの(母)は上に、息子は下にあつた。

ダーヌは横たわっている、仔牛を従えた乳牛のように。(九)

「鼻ちぎ」

sp. h. + subst.

男たちの運往は？  
植民地化？  
男をとりなす？  
女をとりなす？  
水の存在？

止まることなく、休息することのない

競争路（＝奔流）の真ん中に、遺骸は置かれてある。

ヴリトラの内奥を水は分けて進んで行く。

永い暗黒へと、インドラを敵とした者は伏した。（二〇）

ダーサを夫とし、蛇を保護者として、

水は閉じ込められてあった、牛たちがパニに「閉じ込められていた」ように。

隠されていた、水の出口であったもの、

ヴリトラを打ち殺しおえて、彼はそれを開けたのだ。（二二）

馬の尾の毛に、その時、おまえはなつた、インドラよ、

両の牙先を彼がおまえに向かつて撃ちすえた時、唯一の神は。

おまえは牛たちを勝ち得た。おまえは、勇者よ、ソーマを勝ち得た。

下方へおまえは七つの大河を解き放つた、流れていくように。（二二）

電光も雷鳴も彼（ヴリトラ）のために（インドラを）押し止めなかったのだ、

彼が霧として、そして雹として撒き散らしたのも。

インドラと蛇とが戦った時、

有能者（インドラ）は後世のためにも最終的勝利を得たのだ。（二三）

蛇の信奉者として誰を見たのか、インドラよ、

〔蛇を〕打ち殺したおまえの心の中に恐怖が到った時、

心臓

彼（インドラ）に對しては

→ TB 談話  
indra-satru-

cf. VādhAmvāk II 1  
(→ No. 17 AIS 147)

<2P 稿>  
if not 3P?

von Sacama: pater dicit  
intra unguis palanti  
die greifen der himmels  
flugel! RV X 108,5

同時に彼が太陽光の回復  
rasa 西の川の河川

(二陽来復)

P. 24  
Notiz

- (1) 「形造る者」たる神。本章2の第三節をも参照。
- (2) または「生まれたばかりの」つまり「当歳の」。
- (3) コブラの威嚇する時の姿。
- (4) 「活力」の原義は「若さ(の力)」。息子を失って急に老い込んだ意味か。
- (5) 本来、アーリヤ人がインドへ入る前の移動期に出会った敵対部族の名と考えられ、「神々の敵、悪魔」ほどの意味で用いられる。ここではヴリトラの母のこと。
- (6) ダーヌ(前注)と起源は同様で、「悪魔、敵、召使い」などの意味で用いられる。ここではヴリトラのこと。
- (7) パニと呼ばれる裕福な異部族の(避難用の)要塞を破り、中に困り隠していた牛の群れを解放(すなわち掠奪)したことがヴリトラ退治と並ぶインドラの代表的功業である。
- (8) おそらく「移動期にも定住期にも、ひとの」という意味であろう。他の箇所という、ヨーガとクシエーマの両期が念頭にあると思われる。ヨーガはもともと「車に馬などを繋ぐこと」(それから「移動期」、および「作戦活動」、クシエーマは「定住、安住」を意味した。ちなみに、ヨーガ

九と九〇の流れる(川)を  
 おびえた鷹が空間を(越える)ように、おまえが越え渡った時。(二四)  
 a インドラは旅行く者の、(旅の荷の)解かれた者の王である。  
 b 角のない、そして角のある(獣)の、ヴァシユラを腕にする彼は。  
 c 彼こそが、また、王として諸々の境界を統治する。  
 車の外周(リム)が諸々の輻(スポーク)を(包み込む)ように、それら(全て)を包み込む。(二五)

a: Indra = Indra + Varuna  
 b: Indra = Rudra  
 → 12 ekā devā.

興奮の反動、あるいは  
 実生活の事実の確認  
 ありはなすことによる「真実性」の増  
 Soma rebound?

クシエーマは男性形で「獲得と保持」、「獲得したものの保持」、「安寧」などの意味で用いられるが、本来は「移動期にも定住期にも必要とされる財産、基本的生活財」のことであつたかと思われる。

## 2 脇腹から生まれた捨て子

古代（ことに地中海からメソポタミアへかけて）の神話に見出される興味深い要素から成る。捨て子（三、四、五、八）、それも、おそらく川へ、召使いの女を介して（八）、父親殺し（一二）、長期間にわたる妊娠の後、脇腹からの誕生（二、二、四）。いずれもヴェーダ文献では孤立したモチーフである。本来の「リグヴェーダ」の詩作伝統の外にあつた民間の伝承・神話から材料を採り、この詩の作者が独創的に加工したものであろう。脇腹からの誕生というモチーフは、ずっと後世になつて北伝仏教の仏陀生誕伝説に再び孤立的に現われる。家庭内のことばが見られ、珍しい語形・用法が現われる点でも注目される。

これが昔からの踏襲されてきた道だ、

あらゆる神々がそこから生まれ出てきたところの。

そこから、大きくなつたおまえは生まれてくれ。

母を無惨に破滅させるな。（四・一八・二）

遠い旅立ち

中100頁

私はここからは出たくない。ここにはもぐり込み難い困難がある。横切つて脇腹から私は出たい。

多くのまだ成されていない事柄が私によつて成されねばならない。ある者とは戦うことになるう、ある者とは相謀ることになるう。(二) 去り行く母を彼は目で追つた。

ない、ない、ついてゆきたく。ついて、やっぱりいきたい。

インドラはトヴァシュトリの家でソーマを飲んだ、

百価にあたる、二つの桶に搾られた(ソーマ)を。(三)

何で彼女は見捨てようとするのか、千の

月々と多くの年の間身籠もつていた(彼を)。

彼に匹敵するものなぞ、だつてありはしない、

生まれた者たちの中にも、生まれてくる人々(の中にも)。(四)

非難されるべきもののように思つて隠した、

母は活力にはちぎれるインドラを。

するとインドラは自分で外衣を纏つて立ち上がったのだ。

天地両界を彼は生まれつつある間に満たしていた。(五)

これらの者たちは生き生きと(アララーと)流れている、

天則(宇宙秩序)に従う(……)のように互いに叫びあいながら。

iva ~ziz?  
cf. III 30, 12  
→ p. 19 ná

丸太を二つに割つて  
それをハもくりぬいたよ、

ニつ用つて↓樹木の橋を

母はおまへに  
 水に親縁をそつ  
 (子) おまへの川の子神  
 (子) おまへの川の子神

Prof. Opf.  
 f. (Vergangenheit)  
 Vermuthly in d/

これらの「水」に問いただせ、何をここに語っているのか。

何の岩、囲み水を水たちは破っているのか。(六)

いつたい彼(インドラ)に献呈の言葉を語っているのだろうか。

〔それとも〕水たちはインドラの非難されるべき点を定めたがっているのか。

私の息子はこれらの大河を、偉大な武器で

ヴリトラを打ち殺してから、解き放った。(七)

わたしのせいで若い婦人(侍女か)はおまへを捨てたのではないのか。

わたしのせいでクシャヴァー(川の名か)はおまへを飲み込んだのではないのか。

わたし故にこそ水たちは幼な子に憐れみを示したのだろうか。

わたし故にこそインドラはすつくと立ち上がった。(八)

わたしのせいでおまへの、能力ある者よ、両顎を

コブラ(ヴリトラ)は、刺し倒して、打ち飛ばしたのではないのか。

今度は刺し倒されたおまへが優勢になって、

ダーサ(ヴリトラ)の頭を武器で叩き潰した。(九)

若い牝牛は、がっちりした、力強く歩む

挑み難い太い雄牛、インドラを生んだのだ。

嘗めてもらうことのなかった仔牛を母は歩みに「つかせた」、  
 自らの行く道を自分で求めている「彼」を。(一〇)

母 || 水 河 川 の 親 戚  
 cf. Purāna  
 u. Itihāsi.

そして母は水牛(＝インドラ)のあとを目で追った。

あれら神々はおまえを見捨てている。

その時インドラはヴリトラを打ち殺そうとして言った。

仲間、ヴィシユヌよ、もつと大きく闊歩せよ。(二二)

誰がおまえの母を寡婦にしまったのだ。

赤子であり(ながら)歩んでいるおまえを誰が殺そうとしたのか。

どの神がおまえに対して憐れみをもったのか、

おまえが足を擱んで父を亡き者にした時。(二三)

落ちぶれてわたしは犬の内臓を(自分のために)調理したのだ。

神々の中に私は憐れんでくれる者を見出さなかつたのだ。

私は妻が敬意を払われていないのを見た。

そうしたら鷹が私に蜜を持って来てくれたのだ。(二四)

(1) 「形造る」神。本章1第二節参照。ここではインドラの父と解釈される。

(2) 女性複数形の形容詞の背後に何が意図されているのか不明。

(3) 本章1の注3と同じ語。

(4) インドラのことば。

(5) 「蜜」は精神を昂揚させる蜜酒を意味したが、インド・イラン共通時代になってソーマが興奮剤の役割を担う重要な飲料となった。ここは具体的にはソーマを指し、その呼称として古い語が残

土地の牧畜、  
領土のとりこめ

Asura 後の神話では原住民が  
とまわっている

Undine ~ unvasi

異部族(異制度)の女, 母系, 実家

## 3

## 水の誓い

つたもの。

ヴァルウナは元来王権の神格化と推定され、秩序を監視する性格が特徴的である。秩序概念としては——いずれも定義することが難しいが——機能するレヴェルを異にして、リタ(天則、真理、宇宙秩序)もともと「合致していること、かなっていること」、ダルマン(「おそらく全体との関係、社会的レヴェルを中心とした」)基盤、規範、秩序、法則、義務、法律、ヴラタ(「個別的・個人的レヴェルでの」)務め・義務、掟、誓い・誓戒)が重要概念である。ヴァルウナは義務・「法律」や掟・誓いの履行を監視する。そのためにスパシユ(スパイ、目付け)を放ち、罪過ある者を捕縄によって罰する。「捕縄」の具体的現われとしては水腫(水気による身体のみくみ)が挙げられる。これらの「神話」の背景にはさまざまな要素や長い歴史があろうが、その一つに水を介在させての誓いという風習が働いていたように思われる。「水」を意味する単語には元来、物質・材料としての水を表わすものと、生命をもった水を意味するものがあつたが、インドでは後者の単語(女性複数でアーパス)および観念が圧倒的に優勢であつた(「火」についても平行現象が見られる)。誓いの場に立ち会つた水が、いたるところに存在する水たちと連絡しあつて(水が水位を一定に保ちあう性質に注目された)、誓いの履行を監視し、違反があれば体内の水が罰を与える、というような観念の存在があつたのではないだろうか。ヴァルウナの水との結びつきは「リグヴェーダ」で既に深い、この性格はますます強くなり、仏教では「水天」となる。

分担

天理